
月色に花ひらく

藤堂かのこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月色に花ひらく

【Nコード】

N3940W

【作者名】

藤堂かのこ

【あらすじ】

肘の故障がもとで、野球を手放さないといけなくなった。野球を教えてくれたのは、ひとつ年上の女の子。甲子園に行けない怜の代わりにずっと野球を続けていくはずだったのに、その約束も守れなくなった。側にいると苦しい。だから遠ざけようとしたのに、俺はどうしても野球と怜に対する気持ちを断ち切れない。もう、手に入らないものをほしがることは辞めようと決めたはずなのに。

肘の故障がもとで野球をやめてしまった幼なじみ。久しぶりに再会した直は髪も伸びて大人っぽくなっていたけど、私の知る直とは

ちよつと違つてた。知らない間にできた距離。また野球を取り戻してほしいと思うけど、野球のことを会話に載せようとするたび、かげる表情に私は何も言えなくなる。ねえ、どうしたら野球をやっていた時みたいに笑ってくれるの？

（2008年度ノベル大賞三次落選作）

直

「……もう、できないの？ 野球」

「うん。ドクターストップってやつ」

泣きそうな怜の声に顔を上げて静かに頷いた。思いの外、穏やかにこぼれた声の調子に自分で驚いた。怜に「もう野球をやらない」と伝える時には、もっと不様な姿を見せるかもしれないと思っていたのに。

例えば、泣いたり喚いたり。最悪、当り散らしたり。

なのに、俺は今、怜の真っ直ぐな瞳をちゃんと見据えて、口元には笑みさえ浮かべられている。

「だから今日の試合で最後。せめて勝って終わりたいかったんだけど、思うようにはいかないな。ごめんな、格好悪くて」

言うつと、怜は俯いて黙ったまま首を振る。

怜の大きな瞳が自分の顔を映さなくなると、ほんの少しだけ体の緊張が緩むようなそんな気がした。

中学生生活最後の夏。

臨んだ県大会の予選はベスト8にも届かずに終わりを告げた。負けたらそこで野球をやめる、そんな俺の事情になど構うことなく、あまりにも簡単に、あっけなく。マウンドに落ちた汗や涙はもう綺麗にならされて、俺が其処に立っていた足跡の欠片さえ残さない。

試合中、焼けるような疼きを伴って腕にわだかまっていた痛みも、今は氷水に冷やされた皮膚の底。小さな疼きを感じるだけで、投げていた時のような痛みはなかった。

土の匂いと若葉の匂いを孕んだ風が、医務室の白いカーテンの裾を揺らして吹き抜けていく。

肌を撫でる淡い陰影。鮮やかな緑の葉陰の向こうにのぞいた蒼天。昼の月。

濃い、夏の香り。

怜は長椅子のすぐ隣に立っていたけれど、深く俯いているせいでどんな表情をしていたのか良く見えなかった。見つめる視界の中、巡る風が怜の前髪をさらって吹きぬけていく。それでようやく、きつく寄せた眉と泣きそうに歪んだ瞳が見えた。

「怜が気にすることじゃないよ」

言えば、俺より一つ年上の幼馴染は、俯いたまま首を振る。

「泣くなって……」

「……泣いてない」

見上げた口元からこぼれる、絞り出すような声。細い肩が小さく揺れて、服の裾を握る手のひらに痛々しいほどに力が込められている。

「仕方ないよ。成長障害起こすところまで行っちゃったらさ。でもまあ、一応最後の試合まで完投できたしそれで良しかな、って」

「直、^{なお}」

「無茶すぎた」

取り繕うように上向いた視線に、穏やかに答えて苦笑する。肘に当てた氷のうをそつと外すと、あれほど重くわだかまっていた痛みも熱も、ほとんど感じないくらいに引いていた。もう真っ直ぐに伸びることもない冷たい肘を軽く撫でて、そのままゆっくりと立ち上がる。

「俺、先にみんなのとこ戻るな」

「……嫌だよ」

「怜？」

「あたしは嫌だよ、そんなの！ 信じたくない！」

さっきまで泣きそうだったのが嘘のように、決然とした、怯むほど真っ直ぐな視線が俺を捉える。知らず、右肘に触れた指先に、じわり、小さな熱の存在。逃げるように目を逸らして、呟く。

「信じないも何も、実際医者からできないって言われたら諦めるしかねえし」

「そんなの納得できない！ だって、もう野球できないんだよ？」

怜の視線から逃げようとする俺を繋ぎとめるように、白い指先がユニフォームの裾をつかむ。哀切な響きを帯びて、震えた口元から言葉がこぼれていく。

「……もう、投げられないんだよ？」

唇に乗せることさえ苦しげに紡がれた言葉。

怜の瞳を見返すことも、目線を上げることさえ出来なかった。視界の端、苦しげに歪んだ表情から、ひとつ、またひとつ、雫があふれて、震えるくらいに強く握りしめた手にこぼれて落ちていく。

努めて冷静に、野球をやめると伝えるはずだった。伝えられるはずだった。

それなのに、怜の真っ直ぐ自分に向かってくる気持ちに、痛みと一緒に押しとどめていたはずの感情がやり場のない苛立ちを連れてこみ上げてくるのを感じる。広がり出す鼓動が、潮騒のようにさざめいて、じくじくと体を蝕んでいく。

「……何で、笑っていられるのかわかんないよ……」

押し殺したような嗚咽が胸をえぐる。

きつく閉じた瞳の中、球場の歓声が波のように鳴る。高い空に広がる蒼。強い光。濃い土の匂い。汗が頬を伝う感覚。白球に添えた指先。心臓のように、痛みで脈打つ腕。

怜の、声。

全てが衝動のように乱暴に駆け抜けて。ふっと、泡のように消えた。

口元から短く息が漏れて、指先から力が抜けていく。

「……俺だって、諦めたくなんかなかったよ」

ぽつり、涙のように力なくコンクリートの床に落ちた言葉。

泣くことも忘れた様子で瞠目する怜の顔に懨然とした一瞥を投げて、冷然と踵を返す。

「なあ、」

「先戻る」

「直ってば！」

「ついてくんな！」

伸ばされた腕を、叩き返すように怒鳴りつけた。一瞬、交差した視線を乱暴に外して、追いかけてくる視線も名前を呼ぼうとする声も、振り切るように医務室を後にした。

手のひらの中、一瞬だけ怜が触れた指先の熱が残る。白球を投げた時の痺れにも似て、柔く、心の深い場所で痛む。

ひやりとした空気の流れる廊下を足早に歩く。薄暗い非常階段の入口に来たところで、壁を背にずるずるとその場に座り込んだ。

ゆっくりと息を吸い込んで、同じだけの時間をかけて息を吐き出して。じくじくと、蝕むように広がり始めた熱を押し込めるように体を丸める。

「……っ痛え……」

肘を抱き込むように体を小さくして、不様に泣き叫んでしまいたいくらいの衝動を必死に閉じ込めた。

きつく閉じた瞳の中、まぶたの裏がマウンドで見上げた強い光の色ににじむ。球場から届く喧騒は遠く、蝉の声や夏草の揺れる音と混じりあってコンクリートの壁に吸い込まれて消えていく。無機質な鉄筋の壁の向こう、鮮やかな夏の色は見えない。

腕に重くわだかまる痛みも、喉の奥を締め付ける熱さも、全部全部、そうやって飲み込んで消し去ってくれたら。

そうしてくれたら良かったのに。

小さく何かがぶつかり合う音に、ゆっくりとまどろみの中から浮上した。落ちかけた目蓋のまま緩慢な動作で瞳を巡らせると、淡い春の光にぼんやりと霞む視界の中、見慣れた黒髪の後ろ姿が映る。

「……何で、こんなとこにいの？」

未だ夢の中なのかそうでないのか判別がつかないままにぼそりと

こぼすと、きょんとした様子の大きな瞳がこちらに向けられて、次いでそれが気安げに綻んだ。

「おはよう、サボリくん。良く寝れた？」

あの夏の日から、最初の春。

不安定な気候も手伝って、治ったはずの腕が小さく疼き初めていた。

そんな時にソフトボールの授業なんて出たなくて、迷った末に結局さぼった五限の体育。養護の先生が留守なのを良いことに無断で保健室のベッドを拝借すると、春の空気が誘うまま、吸い込まれるように眠りに落ちた。

一時間程度昼寝するつもりが、かなり本気で寝てしまったらしい。壁の時計を見ると既に四時。六限も終わって、部活の時間に食い込んでいた。

「寝過ぎた……」

惘然と呟くと、怜の横顔に浮かぶ笑みが深くなる。

「寝不足だったの？」

「んー、そんなとこ」

「藤川先生さつきまで居たんだけどね、『僕もう帰るから大町まだ寝てたら起こしといてね』。サボりだからそろそろ起きるでしょー」
「って。適当だよ、先生なのに」

「サボりじゃなかったらどーすんだ……」

「本当に具合悪い人はあんな気持ち良さそうに寝てないって、先生言ってたよ」

「……」

「具合悪いの？」

「イイエ」

「そ。なら良かった」

淡く笑んで、また前に向き直る。

カーテンレールを鳴らして、陽だまりの香りを含んだ風が吹き抜

けていく。怜の纏め髪からこぼれた後れ毛が、白い首筋でやわらかく揺れていた。

県大会の後俺は野球部を引退して、以来、ほとんど部に顔を出すこともないまま中学を卒業した。怜とは受験勉強が本格化するにつれ会わなくなつて、次第に疎遠になつていった。

高校も怜とは別の私立へ進むことを決めた。

きつと別の高校に入ったら偶然道で顔を合わせることもなく季節は巡つて、胸に宿る想いも、野球への未練も、このまま色褪せて風化していくんだと思つてた。それでいいと思つてた。

なのに、私立校の入試当日インフルエンザでぶつ倒れた。

寝込んでいる間に試験日の早い私立校の試験は全て終わり、完治する頃には公立校の試験しか残つていなかった。当然、高校浪人など出来るはずもなく、俺は一番行きたくなかつた高校へと入学するはめになつてしまったのだった。

「ツメが甘かつたんだよな……」

「……さつきから何一人でブツブツ言つてんの？」

「何でもないデス」

「寝言は寝てる時にどうぞ」

「へーい。……つか、怜は何やってんの？ また怪我したんか？」

「またつて何、またつて」

「だつて良く怪我するじゃん」

「……否定はできない」

ベッドから降りて、怜のおだんご頭の上から手元を覗き込む。小豆色ジャージの膝の上には、赤い救急箱。そして、手首をひねるように伸ばされた怜の腕の中央、肘の外側には、血を盛大ににじませた大きなすり傷ができていた。

「うつわ！ 痛エ！」

「うん、いてえよー」

あまりの惨状に、自然と目線が傷から逃げる。

「何やったらそんな盛大に怪我すんだよ」

「遊びでノックに混じってたらこけちった」

さらにそう言つてのける怜に、俺は盛大に顔をしかめてみせた。子供の頃、俺を野球の道に引つ張り込んだ幼馴染は、今でも当時と同じノリで野球をやリたがる。今はマネージャーとして野球部に在籍しているけど、中学時代はソフトボール部で全国大会まで出たほどの腕前だから、お遊び程度の練習ならそれなりについていけるらしい。が、女の子が腕にすり傷作るほどまでに熱中するのはいかなものだろう。

「ちゃんと水で洗ったんか？」

「うん。適当に」

「大雑把。傷残つても知んねーから」

ため息まじりに言いながら、怜の前にある丸椅子に腰を下ろすと、目の前に絆創膏が二枚、突き付けるように差し出された。

「……何？」

怪訝な表情を浮かべて怜の顔を見返すと、絆創膏と怜の目線が、俺からすり傷の部分に移動する。

「一人じゃ貼れない。……ということに今気付いた」

「……貼ってくれ、と？」

「うん」

「……世話のかかる先輩」

半眼で呟いて、怜から絆創膏を受け取った。

「抜けてきて平気なのか？部活」

「だいじよぶ。千鳥にお願いしてきたから」

「ああ、そっか。千鳥先輩、元気？」

訊くと、怜は軽く頷いて顔を綻ばせる。

「うん、元気だよ。一年生いっぱい入ったから張り切ってるし」

「そっか。あの人も結構な野球狂だもんなあ」

「うはは。まあ、一年の実力はまだ良くわかんないから、ゴールドンウィークの合宿で見極めだけどね」

「ゴールデンウィークも部活か。球児は休みねえなあ」

「目標はでかいですから」

「はは、違いねーわ」

微笑いながらそう言っ、怜の肘に絆創膏を貼り付ける。手元に、次いで顔に、怜の目が動いたのが視界の外に見えた。

「……直は？」

「うん？」

笑みを含んだ目線を向けると、怜の口元があの形の形を作って、次にはためらったように元に戻る。俺と交わっていた視線を外すと、弾みをつけて立ち上がった。

「なんでもね。あたし練習戻るわ。コレ、ありがとね」

「うん。どういたしまして」

「あ、出たら職員室に寄って鍵かけてもらってね」

「んー。わかった」

小さく頷いて、保健室を出て行く怜の背中を見送る。

その足音が消えるのを待ってから、俺はゆっくり立ち上がって保健室を後にした。

一年の校舎と保健室のある棟を結ぶ渡り廊下は中庭に面していて、中庭を囲むように植えられた桜の木が、夢のようにひらひらと薄紅の花びらを散らしている。

何気なく差し出した手のひらに、ひとつ、舞い降りる薄紅の花びら。ほのか、柔らかに香る春のかげら。

野球を教えてくれたのは一ヶ月前の怜だった。

野球が大好きで、地元のリトルリーグにまで入っていた女の子。越してきたばかりで右も左もわからない状態の俺は、ほとんど毎日怜に無理やり連れ出されては、男子顔負けの速球のキャッチボールに付き合わされてた。

今でこそ髪も伸びて、顔も体つきも女の子らしくなってきたけど、小学生の頃なんて髪は短かったし、肌も真っ黒だったし、男の子と

間違えられることだつて珍しくなかった。

今でも時々思い出す。

怜の母親が怒って迎えに来るまで、近所の仲間と白球を追いかけていた夏の夕暮れ。オレンジに染まった世界。蝉時雨の波。交わした、遠い日の約束。

「ごめんな」

ぼつりとこぼした言葉は、知らず自嘲するような響きを帯びる。怜の言いたいことなんてもうわかりきってるのに。それなのに、怜の優しさに甘えて知らないふりをさせてもらってる。

吹き上がる風に浚われて、舞い上がる花びらの軌跡を追いかけた。乱暴に感じるほどに強く吹く風に、薄紅の欠片は渦をなして空に上る。頭上で空に溶ける風に散って、雪のように降り注ぐ。

天心に、淡い空色を切り取る昼の月。

俺の頬を掠めて、風を集めて、蒼天に咲き誇る桜の花。けれど、目いっぱい伸ばした肢体も風に乗る花びらさえも、空を白く切り取る月には届かない。

まして、己の伸びきらない腕ならなおのこと。

遠い蒼の向こう、あの月には届かない。

怜

一番近くにいると思ってた男の子が、本当は物凄く遠かったのだ
と思い知らされた。

あの、夏の日。

暑気を孕んだ風が、小さくカーテンレールを鳴らして吹き抜けて
いく。直の肘にあてた氷水の中で、きらきらと揺れていた淡い陰影。
のぞいた蒼天。鮮やかな若葉の緑。

濃い、夏の香り。

いつだって野球のことで頭がいっぱいで、試合の時も厳しい練習
の時も、泥だらけになって楽しそうに笑ってる顔が好きだった。こ
の先もずっと直が野球をする姿を見てられるんだって、当たり前
のように信じてた。

なのに。

『リトルリーグ肘』だと、そう告げられた。

投げすぎや間違った投球フォームが引き起こす、成長途中の骨へ
の損傷。気付いてあげられれば、成長障害を起こすところまではい
かなかったかもしれない。それなのに、新しく始まった高校生活に
馴染むのに頭がいっぱいで、直が抱えていた痛みに気付いてあげる
ことができなかった。

「……俺だって、諦めたくなんかなかったよ」

力なくこぼれた言葉は子供みたいに頼りなくて、その中に直の本
当の気持ちを見た気がした。泣いたり、「やめたくない」と喚いて
当たり散らしてくれたら、どれだけ楽だったかわからない。静かに
諦めようと気持ちをおさえつける姿なんて、見たくなかったのに。

ぼつりと、涙のようにこぼれた声に、頷くことさえできず、ただ
その場に立ち尽くしたまま、嗚咽すら逃がすこともできないまま、
泣いた。

何で、直だっただらう。

ただ野球が好きで好きで、上手くなりたくて一生懸命だったけ
なのに。

「……野球の神様は、残酷すぎだよ……」

嗚咽のこみ上げる喉が、胸が、苦しい。上手く息も出来ないくら
いに。

カーテンを揺らす風が夏の匂いを落として吹き抜けていく。にじ
む世界の向こう、直がいた鮮やかな夏の色は見えない。

ドアの向こうに消えたエースナンバーの背中。霞んでいく景色の
中に、夢の終わりを見た気がした。

薄く青を広げた空の裾野に、少しずつ夕暮れの色が混じり始めて
いた。桜の花びらを遊ばせる風もしだいに澄んできて、頬を撫でる
風が涼しい、春の夕暮れ。

「千鳥ー、あたしは本当にヘタレだよー」

言いながら、グラウンド脇のベンチにヨロヨロと歩み寄る。瞬間、
叩きつけられた黒い長方形の衝撃に、私は再度ヨロヨロと後退した。

「遅い！」

「痛い……」

滑り落ちてきたスコアブックを受けとめながら涙目で見返すと、
千鳥の整った顔ににっこりと光が見えそうなほどの眩しい笑みが浮
かぶ。

「何で怪我の消毒に行くだけで三十分もかかるのかしら？」

「す、スイマセン……」

美人から放出される静かな怒気は本気で怖い。及び腰で眩くと、
千鳥は作り笑いを解いて諦めた様子でため息をついた。

「まあ、いいや。怪我は？ もう平気？」

「あ、うん、大丈夫。ごめんね。みんなは？」

「今ランニング出たばかり。しばらく戻ってこないだろうから先に飲み物やっちゃお。……救急箱は？ 中身補充してきてくれた？」

「あ」

空の両手を広げて見せると、千鳥の泣きぼくろのあたりがぴくりと引きつるのが見えた。

「つたく、何のために保健室まで行かせたのかわかんないわ。二度手間……」

「すみマセン……」

緩い波を描く黒髪を耳にかけながら、呆れた口調で呟く千鳥の後ろを体を小さくして付いていく。

三十分ほど前、私がすり剥いた傷を消毒しようと救急箱を開けると、もう消毒薬の残りがなくなっていた。傷の手当てをするついでに救急箱の中身も補充させてもらってくる、という名目で部活を抜けてきたのに、途中他のことをしてる間にすっかり頭から抜け落ちてしまっていた。手当てをしたり、直と話してるうちに。

「あ、そう！ そう、千鳥！ さっきの話！」

「んー？」

「あたしさっき保健室で直と会ったんだけどね」

前を歩く千鳥に追い付きながら言うと、千鳥はあからさまに顔をしかめる。

「ああ、いちゃついてたから時間かかったの」

「ちつがーう！ そーいう関係じゃないっての！ 幼馴染！」

「あー、ハイハイ。で、今度はまた一緒に野球やろう、って、言えた？」

がつくりと頂垂れた私を見て、千鳥は呆れた様子でため息をついた。

「……ヘタレ」

さっき自分でそう言いましたよ。

職員室で鍵を借りてから保健室に置き忘れていた救急箱を回収する。また職員室に戻って鍵を返して、今度は社会科準備室でお茶と氷をウォータージャグに用意。グラウンドと社会科準備室を二往復してベンチにそれらを設置すると、それだけでもうかなりの時間が経っていた。

「さて。そろそろみんな戻ってくる頃かな」

「だね。あとは何してよっか。千鳥はさっき一人で何してたの？」

尋ねると、千鳥の視線がベンチの端に置いたスコアブックを示す。

「データ解析。来月、練習試合決まったでしょ？」

「え、もう相手校のデータ揃えてきたの？ はっや……」

「イエス。当然」

千鳥は野球部員ですら引くほどの高校野球狂だ。

知識も情報も異常なくらい豊富だし、データ解析も驚くほど丁寧で細かい。何でも、家のパソコンには三年分の地方大会と甲子園のデータが入っているとかなんとか。最早マニアの域。練習試合でそこまで緻密なデータをとる必要はないんだろうけど、これはもう千鳥の趣味だから仕方ない。

「続きやつても良い？」

「うん。じゃ、あたしボールの修繕やっちゃうよ」

「ん。よろしく」

「はい。しかし、最近ボールの消耗早いよね。一年生いっぱい入ったからかなー」

「そうかもね。豊作でありがたいことだけど、女子マネ獲得ゼロは痛かったわ」

「あー、確かに」

去年の県大会の成績がそこそ良かったおかげか、それとも千鳥効果か、今年の新入部員は私たちが想像していた人数よりもずっと多かった。部員が多くなるのは喜ばしいことだけど、当然、それに比例してマネージャーの仕事も増える。

前の三年生が引退してから今まで、四人でやっていた仕事を二人でどうにかこなしてた状態だったから、これが夏大まで続くとなるとちょっと大変かもしれない。

「そういえば、新歓の時に思ったんだけどさ」

「うん」

「直君、ちよつと大人っぽくなってたね。最初わかんなかった」

「ああ、そだね。髪の毛伸びたし」

千鳥も私と直と同中の出身だ。千鳥と直にあまり接点はなかったけど、私がちよこちよこ話に持ち出すものだから自然と顔も名前も覚えてしまったらしい。

「髪型もあるけど、何て言うのかな、雰囲気がちよつと落ち着いてたというか。男の子も一年で変わるものなんだね」

「……ああ、それは、確かに」

唇からこぼれた言葉が、力なく響く。千鳥が訝しげに呼ぶ声に取り繕うように小さく笑って、針とボールを箱の中に戻した。

膝に肘をついて、遠く、眺望する主のいないグラウンド。西の空に混じり出すオレンジ色に、風に舞う桜の花びらが溶けていく。

「何か、直が遠くなった気がしたな。あたしは」

昔はなかったはずの距離感。

小・中と学校が離れた時だって、会えば一緒にキャッチボールしてたし、お互いの家に行き来するのだってほとんど気を遣ってなかったはずだった。

それが、あの夏の日以来、二人の間に出来てしまった微妙な距離と境界線。

私立受験を決めたことも、それがダメになって同じ高校に入ってくることも、全部母親から聞いてたけど、新入生歓迎会の日体育館でばったり直と会った時には、動揺してぎこちない対応しかできなかった。

直は、全然変わらずに接してくれたけど。

「あたしが男の子だったら良かったな」

「え。何でまた」

「だって、男同士の方が言い易いことってきつといっぱいあるじゃない？ それに、男同士だったらキャッチボールで心の会話！とか、拳でわかり合う熱い友情！ みたいのが出来たかもしれないし！」

「いや、それは肯定しかねるけど。だいたい、直君そういうタイプじゃないでしょ……」

呆れ顔の千鳥の言葉に、私は握りこぶしを解いてしょんぼりと肩を落とした。

新歓の日、直が普通に接してくれたことが悲しかった。

私は直の痛みに気付けなかったことをずっとずっと悔やんできたのに、直にとってはもう、あの夏の日のこと、野球も、全部終わりになってしまってるみたいで。

「……「諦めたくなかった」って、そう言ってたのにな」

泣きそうな声で呟いたあの言葉は、今でも棘みたいに胸に刺さったままでいる。

だけど、一番側にいると思っていた幼馴染に手を振りほどかれたことが悲しくて、傷つけるのも傷つけられるのも怖くて、新歓で再会するまで自分から会いに行くこともできなかった。

新歓の後も、何度か直と話す機会はあった。

でも、野球のことを話題に乗せようとすると、揺らぐ直の瞳の奥に、何も言えなくなる。たった一言、「また野球しよう」と言うだけのことが、こんなに難しいなんて思ってた。

「合宿、誘ってみたら？」

苦笑まじりの言葉に疑問符を浮かべると、千鳥はスコアブックに目線を落としたまま言葉を続ける。

「マネジの仕事手伝いつて名目でさ。他の人が野球してるの見たら、また自分もやりたい、って思ってくれるかもしれないじゃない」

「き、来てくれるかな……？」

「さーあ？ それは直君の気持ち次第だけど」

悠然と呟いて、大きな瞳を虚空に向ける。

「何もしないよりはマシだと思うよ？」

そう言って柔らかく笑うと、千鳥はスコアブックを体の横に置いてゆっくりと立ち上がる。横顔に射す柔らかなオレンジ色の光。

野球部員たちのランニングの掛け声が、グラウンドに近づいてきていた。

直

「直くん、ゴールデンウィークヒマ？」

「断る」

「……」

其処此処に落ち着かない喧噪のわだかまる昼休み。教室の廊下側、一番後ろの特等席。「何で？」と問うこともなく俺が即答すると、顔を右斜め四十五度に傾けた状態で怜は笑顔を引きつらせた。

「何よー！ 何も言つてないじゃないの！」

「いやいやいや、無理。お前がそういう顔する時つてろくなこと言
い出したためしがねーもん」

「失敬な！ 物凄く良い話だったらどーすんの？！」

「あー、ハイハイ、聞くだけ聞きますよ」

頬杖をつきながら先を促すと、怜はわかりやすく顔を輝かせて身
を乗り出して来る。単純。

「あのね、こないだゴールデンウィークに合宿行くんだって、言っ
たじゃない？」

「ああ、聞きましたね」

「静岡なんだけど、直も良かったら一緒に行かないかなって」
「断る」

「何で？！」

「そんな俺が聞きてーよ。だいたい部員でもない奴がそんなとこ
くつついて行くっておかしいだろ？」

「えー」

「えー、でなくて……」

「あ、マネジの仕事手伝って名目でさ。あたしらも合宿中はやる
こと多いから手伝ってもらえたら助かるし」

「……」

「観光もできるよ！」

頹杖をついたまま横目で視線を遣ると、懇願するような表情で答えを待つ怜の姿。ひとつため息をついて、椅子の背もたれに寄りかかった。

「いや、悪いけどさ、ゴールデンウィークは本当無理。親の実家帰るから空けとけ、って言われてんの」

「え、おじちゃんとおばちゃんと出かけるの？」

「そ」

「……そう、かあ…おじちゃんとおばちゃんと一緒か。じゃあ仕方ないね……」

ちらりと、視線を上げれば、怜の顔からゆるゆると消えていく笑顔。小さく胸が痛んだのを打ち消すように、机の上に次の授業の教科書を乱暴に取り出した。

「そういうわけなので。悪いけど」

「……うん、わかった。じゃあ諦める。ごめんね無理言つて。あたし教室戻るわー」

「うん」

顔を見ないで頷くと、視界の端に怜がすごすごと離れていくのが映る。しょんぼりと頂垂れて歩く怜を半眼で見送りながら、ため息まじりに呟いた。

「魂胆が見え見えなんだよな……」

「なーなー、今のって姉先輩だよな？ 直って知り合いなん？」

怜の背中から呼ばれた方へ視線を移すと、前の席に座っていた市村が細くてつぶらな瞳を好奇心で輝かせて、机に身を乗り出していた。

「知り合い、つか、幼馴染」

「マジで？ 幼馴染かー。いーよな」

「そーかあ？ そんな良い物じゃないと思うけど。色々面倒くさいし」

「ぜーたく！ いいよなー、俺超うらやましいけど」

「……いいの？ 何で？」

「だって人気あるじゃん」

「はい？」

「美人だし」

その他にも、スタイル良いとか成績も良いとか色々並べ立てる市村の言葉が右から左に流れていく。情報の出所がどこだか知らんが、中学にあがる時女の子は野球部に入れないと知って、泣いて大暴れした男勝りな野球バカが人気あるとは驚きだ。

「いつも一緒にいる千鳥先輩も美人なんだけどさ、直知ってる？」

泣きばくろがセクシー、なんだよ！」

「ああ、千鳥先輩ね。あの人は確かに美人だけどさ。つーか、何でそんな詳しいわけ？ 俺まだクラスの奴の顔と名前も一致してねーけど」

「部活紹介で二人が挨拶してただろー！ 一年でも榊先輩可愛いって言ってた奴結構いるんだからな。だいたい、高校つつたらやっぱりラブじゃなか！ かわいい彼女作りたいと思わね？」

「あー」

詳しいのは顔の良い女子だけか、とも、千鳥先輩はあまりにも高嶺の花すぎやしないか、とも思ったがとりあえず胸にしまっておく。そろそろ移動しようと腰を上げると、市村もそのままくっついてきた。

「やっぱさー、どっちは堀越先輩と付き合ってたのかな？」

「俺に聞かれてもわかんねーって。堀越先輩も一体誰やら……」

「あ、直、直、アレアレ、堀越先輩と榊先輩！ 今まさに！」

保健室の方へと続く渡り廊下に出たところで、市村が下を指して声を上げた。渋々、手招く方に近づいて視線を投げると、中庭とは反対側の校舎の近くに、怜と背の高い男子生徒の姿が見えた。

「あれ堀越先輩。野球部のエースで主将！ 確か」

「ふーん」

遠目にもわかる、バランスよく筋肉の付いた体とすらりとした上

背。野球部らしい短い髪に、黒ぶち眼鏡が嫌味なくらいに似合っていた。こないだ怪我した肘を指さして何か言っているところを見ると、ノックしたのはあの堀越とやらなのかもしれない。

「アイツか、嫁入り前の娘に傷つけやがったのは」

「は？ 嫁がどした、直？」

怜に向ける堀越の表情はどこか優しくて柔らかい。国宝級の鈍さを誇る怜はその意味になんて、全く気付いてないのだろうけれど。

「……邪魔しに行つてやるか、合宿」

「へ？ 何何？」

「なんでもね」

「ところでさー、直。その鉄柵老朽化してるから、あんまり体重かけるとあぶねーよ？」

「な、もつと早く言えよ、そう言うことは！」

「今言つたじゃーん。でもこないだまで看板かけてあつたのになー。危ないよな」

「風で飛んだとかじゃね？」

「うーん、そうかなあ。まあ、一年は普段ここ使つからみんな知ってるだろうけど、イタズラとかだつたら悪質だよなー」

まだブツブツ言っている市村の声を聞き流しながら、怜たちから目を背けるように踵を返す。

親しげに笑う怜の顔は見えなかったことにした。

怜

「結局ダメだったわけね」

静岡へ向かうバスの中。

遠足の時に似た高揚感で騒いでいた部員たちの気持ちも落ち着いてきて、高速に乗る頃にはほとんどの部員が寝たり、静かに隣りと話したりしていた。

車に弱い部員が寝てしまえばマネージャーの仕事も一段落で、通路を挟んで隣りの席で爆睡する監督を起こさないよう、お菓子の箱を開けて小休憩を始めていた。

「んー、だって両親と出かけるって言っから。滅多にない大町家の団らんを邪魔しちゃいけないと思って……」

「……前からちよつと気になってたけど、直君の家つてご両親仲悪いの？」

「うーん、まあ、あたしもお母さんから聞いてるだけだから詳しくは知らないんだけど、共働きだし放任だし、直はあんまり構ってもらってないらしいんだよね」

「へー」

「昔はあたしもお世話になったし、そうでもなかったはずなんだけど、まあ色々あったらしくて。でもそのへんは人の家のことなので

……」

「勝手に想像するわ」

「うん、そーして」

「でも、そんな風になっちゃってるのに、家族で出かけたりするかなあ？」

「へ？」

「嘘じゃないの？ それ」

「……！」

今更気付いて口をパクパクさせると、千鳥は呆れた様子で薄笑いを浮かべる。

「あーあ、本当にこの子は人のこと疑わないんだから」

「ち、く、しょー……直のくせにいい」

「嘘ついてまで来たくなかったんでしょ」

「うー……」

「直君、リトルリーグ肘だっけ？ あたしも実際見たことはないけど、直君みたいに肘が伸びないとこまでいっちゃうと、治療結構大変なんでしょ？」

「……うん、大変」

直に肘の故障を告げられてから、治療方法やリハビリについて自分なりに色々調べた。

成長障害を起こすところまでいってしまった肘で、また野球をできるように治療していくのはかなり面倒で、長期的なスパンで、辛抱強いリハビリと治療を続けていかないといけない。手術をする手もあるけど、未成年の腕にメスを入れるのはあまり好ましいことではないらしい。

当然、リハビリには時間もお金もかかるし、家族の協力なしには成り立たない。

けれど、直が野球を続けることを、おばちゃん、直の母親は好ましく思っていない。その上共働きで家を留守にしがちな二人のことだから、リハビリを手伝ってもらうのはかなり難しいと思う。まずは直の両親を説得するところから始めないといけないけど、さすがにその領域に私は踏み込めない。

だから、まずは直本人にもう一度野球をしたいと願ってもらえないのだけれど。

「道のりは厳しいわねー」

「そんなん、百も承知デスヨ」

思い出すのは、バカみたいに野球が大好きで、試合の時も厳しい練習の時も、いつだって楽しそうに笑っていた直の顔。

その顔が好きだった。

野球を取り戻して、あの時みたいに笑っていてほしい。
ただ、それだけなのに。

「しかし残念。男手があれば少しは仕事楽になるかと思ったのに」

「……千鳥？ まさか初めからそのつもりで……」

強張った表情で訊くと、千鳥は世にも愛らしい姿で瞳を瞬かせた。
「そうよ？ だって部員でもないのに手伝いに来るって変じゃない。
まあ、来てくれたら怜も私も助かるし、一石二鳥かな、くらいの気
持ちで」

「ちどりのいい……！」

「榊！ お前うるさい！」

怒りに声を震わせると、隣の席の監督から、苦情と一緒に野球
帽が飛んでくる。今まで監督の顔に乘せられて加齢臭と口臭をふん
だんに纏った野球帽は、おだんごに引っ掛かって見事顔面に不時着
した。

理不尽だ。

直

高く高く、澄んだ空に飛行機雲が伸びていた。嫌味なくらいに良く晴れた、ゴールデンウィーク初日。ファーストフード店の二階席から見下ろす駅前通りの人は人であふれていて、家族連れやカップルが楽しげに通り過ぎてく。

平和で平凡な、休日風景。

ちらりと横に視線を遣ると、市村が幸せそうな顔でハンバーガーを頬張っていた。思わず嘖き出しそうになったのを堪えて視線を逸らすと、市村の怪訝な表情が追いかけてくる。

「どした？ 直。食わねーの？」

「や、食べるけど。旨そうに食うなあ、と」

「だって旨いもん」

むぐむぐと口を動かしながら器用に答えて、残りのハンバーガーを飲み下す。頬についたケチャップに気付くこともなく、市村はすぐさま二個目に突入した。

「でもさ、直がこうやってちゃんと来てくれるとは思ってなかった」

「……お前、あんな迷惑メール寄こしといて何を言うか」

今朝目が覚めると、市村から着信が二件とメールが一件届いていた。

半分寝ている頭でメールを開くと、『直今日ってヒマ？ ヒマだよな？ 十一時に駅前で待ってるから遊ぼうぜー。来てくれるまで待ってるから〜』と絵文字満載の文が並んでいた。無視してやるつかとも思っただけ、駅前に放置しておいて後でぶーぶー文句を言われるのも面倒で、渋々ここまで自転車をこいで出て来てやった。貴重な二度寝の時間を犠牲にしているというのに、この言い草。

半眼でねめつけると、市村は悪びれた様子もなく笑う。

「やー、だって、部活全部午前中で終わるから、午後はヒマで。

も、何となくだけど直ってあんまり人と付き合いたくないのかと思
ってたから」

人当たりの良い笑顔で、けれどしっかりと核心を突いている市村
の言葉に、内心驚いて続ける言葉に困った。けれど、市村はそんな
俺の内心を知ってか知らずか、相変わらぬ笑顔で答えを待たずに
喋りだす。

「ま、でもいいや、実際こうやって来てくれたし。これからどこ行
く？ 映画？ゲーセン？ カラオケ？ あ、俺実は結構歌うまいよ
直は？」

自分から誘っておいてノープランなのか、こいつは。

「……行ったことない」

「マジで？ 超希少人種！」

「仕方ねーだろ。中学の時は放課後ずっと部活だったし。塾も行か
されてたから遊ぶ暇なんかなかったし」

「へーえ。何やってたのか聞いても良いか？」

ほんの少しだけ、答えることをためらった。

けれど嘘を吐くのも答えないのも何となく違う気がして、正直に
答える。

「……野球」

と、市村は一瞬ぼかんと俺を見つめて、その後盛大に噴き出した。
「ウツソだー！ 見えねー！」

「な、おま、失礼な！ 汚ねーし！」

「だって爽やかと縁遠いもん。幸薄そーな顔してるしさー」

「おま、それでもピッチャーだったんだからな！ 守備の要！」

口の中が見えるのもお構いなしに大笑いする市村に、ムキになっ
て反論する。椅子から腰を浮かしかけて、ふと、周囲からの痛い視
線に気がついた。市村と気まずげに顔を見合せて、お互い体を小さ
くしながら椅子に座り直す。

「でも、高校ではやらねーの？ やっぱ野球ついたら甲子園じゃん」
幾分、トーンを落とした声で訊く市村に、頬杖をつきながら頷い

た。

「やらない。……目指してたけど、怪我してやめた」

市村は途端に表情を曇らせた。気まずげに視線を泳がせて、それからゆっくり言葉を探すように唇を開く。

「怪我って、腕？」

「そ。肘。投手には致命的だろ？」

「……未練とか、全然ねーの？」

「全然。あつたら今頃リハビリしてるって」

「そっか。そう、だよな」

どこか安心したような表情を見せる市村に「そーそー」と軽く返事をして、烏龍茶のストローを口に運ぶ。

噓。

本当は、ありすぎて困ってる。

野球が好きで、投げることが楽しくて仕方なかった。

毎日泥だらけになって、日が暮れて真っ暗になるまでボールを追いかけた。腕のしなる感覚、キャッチャーミットに真っ直ぐ届く球の音、手のひらに残る土の匂い、踏みしめたマウンドの感触。

体の全ては野球に向いていて、それ以外のことが入る隙なんて作ろうともしなかった。練習したらそれだけ球威も増して、どんどん上手くなって強くなって、全国だって目指せるようになって信じていた。それが、成長期の体にどんな風に作用するかなんて、全く考えようともせずに。

疼くように、蝕むように、重い痛みが肘にわだかまり始めたのはいつからだっただろうか。最初は内側から。次第に、外側へと移りだした痛み。原因を知るのが怖くて、痛みから目を逸らして、毎日やり過ごして。無視しきれないほどの熱を持ちだした腕をようやく医者に見せた頃には、もう野球を続けることが困難になっていた。

突然消えた生活の中心。おかげで一日が物凄く長い。野球を辞めてから、ずっと。

長くて、長くて、息がつまりそうなほど。

だから、相変わらず野球漬けな毎日を送る怜を見てみると、正直苦しくなったりもする。そうなることがわかっていたから、会わないようにしていたのだけど。

「よし」

市村の声に、俺は自分の世界から浮上した。見ると、市村のトレイの中のハンバーガーやポテトが全部空になっている。

「早……」

「じゃそういう直にはカラオケだ。カラオケ行こう！ 記念すべき直のカラオケデビュー」

「えええ。俺あんま歌上手くねーけど……」

「問題なし問題なし！ 大声で歌うことに意義があるんだって。つーわけで、直、早く食え」

こちらの言い分をほとんど受け流して話を進める市村をねめつけながら、急かされるまま自分の分のハンバーガーを口に運ぶ。

「直はさ、明日も空いてるのか？」

「……残念ながら」

「じゃあさ、明日も遊ばね？ 昼からなら俺もヒマだし」

「え」

顔を上げて瞳を瞬かせると、市村の顔が得意げな笑みの形に綻んだ。

「二人でいれば退屈しないだろ？」

ぼかんと見返すと、更に深くなる市村の笑顔。何だか毒気を抜かれたような気がして、力なく笑みをこぼした。

「野郎二人でゴールデンウィークとか、すっげー不毛」

「素直じゃない！」

怜

「桝、髪に花ついてる」

呼び止められて振り向くと、堀越先輩が自分の髪に軽く人差し指を当てて立っていた。

「え、もうみんな休憩ですか？ あ、うわわ、どうしよう、お茶……！」

「あ、大丈夫大丈夫、今俺だけ休憩なんだ。投球練習してたから」
爽やかな笑顔でそう言って、洗濯籠で両手が塞がっている私の頭に手を伸ばす。髪に触れる大きな手のひら。差し出された手の中を覗き込むと、白い花びらがのっていた。

「あ、本当だ、スイマセン」

「何だろ、これ。椿？」

「あ、花水木ですね。さっき下通ってきたんで、多分」

「桝は洗濯？ 持つよ？」

「え！ いやいやダメです！ エースに雑用なんてとんでもない！
休んでてください！」

「……うん」

差し出した手から私が勢いよく後ずさると、堀越先輩は少しだけ困った様子で頷いた。

地元では少し前に桜が終わったばかりだというのに、静岡ではもう花水木やツツジの花が其処此処で咲き誇っていた。小高い丘の上にある合宿所からは眼下に茶畑が眺望できて、新茶を摘む人の姿も見える。

風にそよぐ鮮やかな緑色の波。柔らかな、若葉の匂い。

「もう一人、手伝いで来るかもって言ってた後輩、結局来れなかったのか？」

合宿所裏手の物干し場で洗濯籠を下ろす。ここでも堀越先輩は手

伝うと言ってくれたのだけど、エースにマネージャーの雑用を手伝わせるなんて言語道断。結局何も手伝わってもらえないまま、先輩は手持無沙汰そうに縁側に座っていた。

「は！ す、すいません、言いつ放しでちゃんとその後報告しなくて……」

「いや、それは大丈夫だけど」

「断られちゃいました。用事あるからって」

弱く笑いながら言って、洗ったばかりの練習着をロープにぶら下げていく。白く洗いあげた服の向こう、のぞく空は雲一つなく綺麗な蒼に澄んでいた。

「良かったですね。ちゃんと晴れて。洗濯も練習も思い切り出来ます」

「はは、確かに。肘は？ もう平気？」

「あ、ハイ、もう全然」

「でも、袖って結構上手いのな。驚いた」

「あ、千鳥から聞いてないですか？ 私、中学時代はソフト部だったんですよ」

「へえ。ポジションは？」

「ショートです」

「ああ、上手いわけだ。でも、高校ではソフト部入らなかったんだ？」

「そついう、選択肢もあつたんですけど」

音を立てて練習着を広げると、鼻梁を掠める石鹸の匂い。洗濯ばさみを拾いながら、口元に苦い笑みを浮かべる。

「柄にもなく乙女チックな話なんですけど、昔、約束したんですよ。幼馴染と。あたしが甲子園行けないから、直が代わりに連れてってくれるって。だから、先に野球部入って待つてようと思って」

確か私が小六、直が小五の夏だったと思う。

中学でも高校でも女子は野球部に入れないと知って、泣いて大暴れたことがあった。母親も上の兄たちの手にも負えないくらいに

泣いて、泣いて、泣き喚いて。そんな時に直が約束してくれた。

『俺が怜の分まで野球を続けて、甲子園に連れて行ってやる』と。

「もう、直は忘れちゃったかもしれないですけど」

「……甲子園なら、俺だって連れてってあげられるけど」

「あ、いや、それはもうそのつもりで。頑張ってサポートしていきますよ」

「……そういう意味じゃなくて、さ」

「ハイ？」

「榊は、その後輩と付き合ってたりするの？」

「へ？」

思わず間の抜けた声が出る。真面目な堀越先輩の表情に、あわてて両手を振った。

「いやいやいや、ないです！ 直はただの幼馴染で、そんな風には」

「そっか」

「はい」

「何もないんだ」

「です」

「じゃあ、俺と付き合い合わないか？」

はい、と勢いで答えそうになって、洗濯物に伸ばした手を止めた。瞠目して振り向いた先に、堀越先輩の照れたような、けれど真っ直ぐに私を見つめる瞳。

「う、え、あの、何で……」

「結構前から、いいな、とは思ってたんだ。良く笑うし、可愛いし。告白するのは、甲子園連れていけたら、って思ってたけど、バスの中で千鳥と男の話してるの聞いちゃったら、黙っていらなくてさ」
瞳が真っ直ぐに私を捉える。

「好きなんだ。榊のこと」

困惑して泳がせた視線の中、通ってきたのとは反対側のフェンスの上に満開の花水木が映る。新緑の匂いをのせた風にそよいで、こちらに手を伸ばすよう花弁を薄紅に染めて咲き誇っていた。

直

雨の日は好きじゃない。

柔らかい髪の毛が湿気で広がるから。机や椅子が湿っぽくてベタベタするから。

もうとつくに忘れたと思っていたはずの腕の痛みを思い出すから。

「雨降りそうだなー」

ベランダの手すりにもたれて見上げた空は一面灰色の雲に覆われていた。頬を撫でる風も湿り気を帯びて温い。

「何だ、直、傘ねーの？」

「うん」

窓枠に体を預けている市村に頷いてみせると、市村は呆れたような表情で顔を眇めた。

「天気予報見てきてねーの？ 降水確率八十パーセント！」

「朝テレビ見るヒマねーもん」

「降ったら入れてってやるつか？」

「いらね。男同士でアイアイ傘とか超不毛。濡れた方がマシ」

揶揄するような笑顔を憮然とした表情に変える市村の前を通って教室に入る。後ろから文句を言いつつ付いてくる市村を適当にあしらいながら席に戻ると、日誌の間に挟んでおいたはずのシャーペンがなくなっていた。

「あれ」

「どした？ 直」

「シャーペンがない。ここ置いたはずなんだけど……」

キョロキョロと辺りを見回して、机の中や下を覗き込む。しばらく市村も一緒に探してくれたけれど見つからなくて、俺は諦めてため息をついた。

「使い易かったんだけどなー。でもまあいいか。仕方ない」

「直ってさ、あんまり物に執着しないタイプ？」

椅子の背に頬杖をつきながら訊く市村に、質問の意図がわからず首を傾げる。

「……何でいきなり」

「だって、今のシャーペンも簡単に諦めたし、二組の今村さんも簡単に別れたし」

「いや、アレは別に。つか、今村とシャーペンを同列に扱ってどうよ」

「俺は知らなかったよ、直！ もう既に彼女いるとかさ！」

「だから、あれは今村が勝手に……」

「勿体ないよなー、あんなにかわいい子簡単に手放すなんてさー。俺だったら泣いて別れるの嫌だーって言うけど」

「……」

人の話を聞く気があるのか、この男は。

そもそも別れたただ何だの話は今村が勝手に進めたことで、俺はあまり関係ない。入学式の時席がたまたま隣りだったのがきっかけで、親しげに近づいてきて、気がつけば弁当作ってきたりマメにメールしてきたり、いつの間になら彼女のように振る舞いだした女。

俺が放っておくと「あたし直君の何なの？」とか何とか公衆の面前で言い出して、付き合ってもないのに別れられた。正直、可愛いかどうかも良く覚えてない。

被害者は俺なのに、いつの間にか俺の方が悪いような扱いになっ
てしまっている。

「女ってめんどくせ」

「わー、ひでーわねー、直」

「……っ！ 怜！ おま、何しに……」

「合宿のお土産。いっぱいあるからお友達君も一緒に食べてね」

「わー、ありがとうございますー！」

廊下側の窓の向こうから突然現れた怜に、市村は動揺することもなく土産を受け取っている。何でこんな社交的なんだ、こいつは。

「榊です。直がいつもお世話になって。直のお友達？ お名前は？」

「あ、市村です市村貴士！」

「市村君。仲良くしてあげてね。ツンツンしてて可愛くないけど、多分照れてるだけだから」

「あ、やっぱりそうなんですか？ やーもう、直君のツンデレぶりはゴールデンウィーク中にしっかり」

「へ？」

「だー、もう！ 出てくんな、市村！」

「ええー、俺だって先輩と話したいのに直ヒデー！ 一緒にキンキ歌った仲じゃんか！」

「あー、ハイハイ。わかったから！ で？ 怜、合宿どーだったんだよ？」

「あ、うん。楽しかったよ。お茶摘みとかやらせてもらっちゃったし。あ、こつちお茶ね、おばちゃんに」

「どーも。つーか、何で一週間も経ってから？」

未だ出てきたがる市村を抑え込みながら尋ねると、怜は何故か気まずげに目を逸らす。

「合宿帰ってきてから風邪で寝込んでたのヨ……。あ、でも賞味期限はまだ大丈夫だから！」

「ふうん。まあ、良いけど、用事ってこれだけ？」

訊くと、怜は何かを思い出したように口を動かして、それから組んだ両手を頬に当てて首を傾けた。

あ、嫌な予感。

「あのね、直君！ 今週の土曜日練習試合があるんだけど、良かったら見に……」

「空いてません！」

ぴしゃりとはねのけると、怜は笑顔のまま固まった。たつぷり三秒睨み合った後、怜は営業用スマイルを解いて渋い顔で舌打ちをする。

「ちつ。直のケチ」

「ケチ呼ばわりされる言われはない」

「あ、じゃあ再来しゅ……」

「行きません！」

「ぶー」

「かわいこぶつても無駄ー」

怜が更に何か言おうと口を開きかけた瞬間、呑気な予鈴の音が教室に響く。二人同時に時計の方へと目を遣ってから、怜は無念そうに口を尖らせた。

「むー、話の途中なのに……。じゃあ、あたし教室戻るね。練習試合の件、気が変わったら連絡してね！」

顔の横に手を上げると、踵を返してパタパタと走り去っていく。

「……やれやれ」

怜の後ろ姿を見送ってほっとしたのも束の間、すぐ横でガサガサと紙を開く音に目を遣ると、いつの間にか俺の腕から抜け出した市村が早速土産を開けていた。

「あ、うなぎパイ！俺これ好き」

「おま、勝手に開けるなっ」

「だって、食べて良いって先輩言うから。あ、そうだ、直君直君、授業始まる前にここの訳教えて。今日当たるの、今思い出した」

「知らん。勝手に怒られろ」

「えええー！ひでー！直の冷血漢！ムツツリスケベ！」

「人聞きの悪いこと言うな！誰がムツツリだ！」

「じゃあ、教えて？」

英語のノートを両手で挟んでさっきの怜と全く同じポーズで首を傾ける市村に、脱力して机に頬杖をつく。もう力り力りしてる方がアホくさい。

「どこだよ？」

「やた！えーと、ここ「cry for the moon」ってどついう意味？月に向かって泣き叫ぶ？」

「おま、それじゃまんま直訳だろ？　ここは「cry for」で泣いて。。を求める」で、「moon」は「不可能なこと」って意味」

「……泣いて不可能なことを求める？」

「つまり？」

頬杖をついたまま目線だけ動かして訊くと、市村は難しい顔でノートを睨んだまま考え込んで、しばらくしてからぱつりと呟いた。

「でもさ、やっぱ榊先輩ってかわいいな」

「お前、訳は……」

「目えぱつちりでさ。睫毛もちよー長かったー。あ、そーそー、知ってた？　直。榊先輩、告られたって」

言いながら、市村は箱から出したうなぎパイを俺に手渡す。

もう知らん。一回怒られるが良い。

「堀越って人？」

「何で知ってんの？！」

「いや、それは俺のセリフなんだけど」

大袈裟に驚いてみせる市村に、若干辟易しながら呟く。ちよつと前に付き合ってたのかなあ、とか聞いてきたのは自分のくせに。

「俺、野球部に友達がいるんだけど、偶然見ちゃったんだって。あ

ーあ、これで榊先輩は人のもんかあ……」

「……怜がオツケーしたわけ？」

「うんにゃ。それは知らんけど。堀越先輩、人気あるぜ？　付き合っちゃうんじゃねーかなー」

「……そういうもんかな……」

ぼそりと呟くと、市村はやけに真面目くさった顔で俺の顔を眺めた。居心地が悪くなつて軽く身を引くと、そこに勢いよく食べかけのうなぎパイがつきつけられる。

「もしかして直君、榊先輩のこと……！」

「……！　ちつげーよ、バカ！」

「凶星……？！　凶星だ！」

「うつせー！ もうお前にはやらん！ 土産返せ！」

「ああ！ 横暴！ 俺のおやつ！」

抗議する市村から届かないように、取り上げた箱を腕を伸ばして遠くへ離す。瞬間、ぎしりと軋むように疼いた痛み顔に顔をしかめた。

「直？ あ、腕？ 腕痛いのか？ 大丈夫か？」

急に俺が腕を抱えてうずくまってしまったせいか、狼狽した様子の市村の声が頭上から降ってくる。大丈夫、と反対側の手を振ってみせると、髪の毛に市村の手のひらが触れる感覚がした。

「ごめんな。ふざけすぎた」

「……平気」

額を付けた机から湿気を含んだ木の匂いがする。少しずつ収束してきた痛み手に手を添えて、きつく両目を瞑る。

「いちいち痛まなくなつて、ちゃんとわかつてるよ……」

怜

「お帰り」

二階へ降りると、渡り廊下の入口で千鳥が待っていた。私を見つけると、ゆっくりと歩み寄ってきて社会の教科書一式を差し出す。

「次移動だって。視聴覚室」

「わわ、ごめん、ありがとう」

教科書を受け取って、踵を返す千鳥の隣りに並ぶ。

「練習試合見に来てくれるって？」

「断られました……」

「ああ、予想通りね……」

「連休におばちゃんたちと出掛けるのもやっぱ嘘だったみたい。新しいお友達と遊んでみたいだよ。一緒にキンキを歌ったって楽しそうに！」

「やっぱり野球やりたくないんじゃないの、直君？」

「千鳥いいい！」

「あー、口が滑った。ごめん」

涙目でにじり寄る私に苦い笑いを返しながら、千鳥は渡り廊下に出る扉を開ける。吹き抜けていく温い風に、濃い雨の匂いがした。立ち止まって見上げた空は、灰色の濁った水底みたいに不透明で暗い。

「雨降りそうだね」

「降るわよ、確実に。私の髪の毛がそう言ってるもの」

「うはは、天パだもんね。わかりにくいけど」

「そー。もうすぐ梅雨だし本当憂鬱だわ。クルクルして腹立ったら」

「ふわふわで可愛いと思うけどなあ」

何気なく呟くと、千鳥は忌々しげに顔を歪める。

「癖っ毛の悩みはストレートの人にはわからない……」

「あ、それさ、直にも同じこと言われたよ。猫っ毛だからほわほわしちやって髪型決まらないんだって」

「へえ。直君もそういうお年頃ですか」

「みたい。でも、昔はヒヨコみたいだったよ。どこに行くにも「れいちゃん、れいちゃん」ってふわふわ頭がぴよぴよこ後付いてきてさ、えらい可愛かったんだから」

「怜がハードに連れまわしてただけじゃなくて？」

「……まあ、そうとも言っけど。それでも仲良くなるまでかなり苦労したんだよ。も、すごい人見知りで」

引っ越し後初めて家に挨拶に来た時も、ずっとおばちゃんの後ろに隠れていたヒヨコ頭。当時、遊び仲間はみんな泥んこ玉みたいな男の子たちばかりだったから、ほわほわした髪の毛と真っ白な肌は珍しくて仕方なかった。

仲良くなりたくて笑ってほしくて、マメに誘いに行ったり、野球を教えたり、獰猛と評判の飼い犬と一緒にちよっかい出しに行ったり、トカゲのミイラをあげたり、蟬の抜け殻を箱いっぱいプレゼントしたりと、とにかく思いつく親切の限りを尽くしたのだ。私なりに。

「あ、あとダンゴ虫もビニール袋いっぱいあげたな。あれだけ苦労したのにさ、市村君が既に仲良さげなのを見ると、姉貴分としてはちよつと複雑で……」

「何でそれで直君が懐いたのか理解不能だわ」

「そおお？」

首を傾けると、千鳥はひきつった顔でゆっくり頷く。そうかなあ。でも、それって本当に幼馴染として複雑、っただけ？」

「え？」

「何か、さっきから聞いてると焼きもち妬いてるみたい。直君の友達に」

心なしに楽しそうな千鳥の言葉に瞳を瞬かせた。

市村君に焼きもち。何で私が。

「だって、市村君男の子だよ？ 彼女さんにならともかく」

「え！ 直君彼女作っちゃったの？！」

「うん。でももう振られたって」

「何だ、びっくりした。侮れないわね、一年女子……」

「へ？ 何が？」

「こっちが経過を楽しみに見守ってるのに、横からしゃしゃり出てきて台無しにされたら困るのよ」

わけがわからん。

「うかうかしていると直君他の子に持っていかれちゃうよ、ってこと。あんなに格好良くなっちゃったんだから」

「……そう、かなあ。昔は確かに格好良かったけど……」

「あら、珍しい。ノロケ？」

揶揄するような千鳥の言葉を聞きながら、ぽつりと呟く。

「だってピッチャーだったんだもん」

「……うん？」

「千鳥は、マウンドの上ってどんなに孤独で誇らしい場所か、考えたことある？」

私の言葉の意味をはかりかねてか、千鳥は大きな目を瞬かせて首をかしげた。

「すごい強い相手にあたってぼっこに打たれても、エースは逃げちゃいけないの。エースが諦めたら、そこで試合は終わっちゃうから。だから、エースは逃げない。最後まで諦めない」

「うん」

「直も、腕が痛くても辛くても、試合が終わるまでマウンド下りなかった。だから格好良かった」

肘の痛みを抱えながらあの炎天下、何も遮るものがない場所での投球。どれだけ辛くて苦しかったのだろうか。見ている方が目を逸らしたくなるくらいだった。

指先で軽く触れた、自分の右肘。私の怪我はもう跡も残さずに綺麗

麗に治ったけれど、直の痛みはまだ、ここの深い深い場所で今も消えずに残ってる。

「今は？」

聞かれて、私は不意打ちを食って瞳を瞬かせた。

「え、い、今って？」

「昔は格好良かったんでしょ？　じゃあ、ピッチャーじゃない直君は格好良くないのかな、って」

言われてみれば確かに、今はどうかなんてそんなの考えたことなかった。

だって、ピッチャーをやってもそうじゃなくても直は直で、ずっと隣りにいることが当たり前みたいな存在だったから。そもそも格好良いかどうかなんて、割とどうでも良かったし。

明後日の方向を見つめて、腕組みをして考え込んで、結局私は困って柵にもたれかかる。

「わかんね」

「そっか」

湿り気を帯びた風が髪を撫でて吹き抜けていく。
もたれた鉄柵が小さく軋む音がした。

直

天気予報の通り、六限が終わる頃から雨が降り出した。

入れていつてやる、という市村の誘いを断つて、少しでも小降りになるのを待っていたけれど、止む気配も小降りになる気配も全くないので、結局面倒になって出てきてしまった。

灰色の空から降りしきる、大粒の雨、雨、雨。俯いて歩く視界はコンクリートの灰色一色で、少し視線を上げてみてもどこか色彩が乏しかった。

バスが行ってしまったばかりなのか、たどり着いたバス停には生徒が誰もいない。

見渡す周囲にも雨宿りができそうな場所がないことに小さくため息をついて、とりあえず鉄柵の上から繁っている木の影に入る。

何気なく校舎の方へ目を遣ると、見慣れたおだんご頭が近付いてくるところだった。

「直！」

「げ」

「何やってんの？ 風邪引くよ！ ホラ、入って入って」

思わず漏らした一言に怜は気がつかなかったのか、近くに寄ってきて傘をさしかける。俺が逃げるように一歩退くと、怪訝な表情で眉間にしわを寄せた。

「いいよ、もう、これだけ濡れたら今更傘入ったって変わらねーし」

「でも、」

「いーよ、誰かに見られると噂になってめんどくせー」

「……じゃあ、あたしも入らない」

むすつとした表情で言っておもむろに傘を畳む。土砂降りとはいかないまでも、雨はかなり強めに降っている。そのせいですぐさま怜の制服のシャツの色が変わっていく。

「何だよ、その理屈！ 怜は傘差してればいいだろ！」

「だって一人だけ差してたら感じ悪いじゃないの。だから入らない」
「わーったよ！ 入る！ 入らせてください！」

「年頃の男の子は面倒くさいわねー」

「……どーもスイマセンね……」

最初からもつと素直に入っておけば良かったと後悔した。

怜の濡れたYシャツが肌に張り付いていて、目のやり場に困る。

「ん。持つ」

「あ、ありがと。何か男前ー」

揶揄するように笑って言う怜から傘を受け取って、少しだけ怜の方へと傘を傾けた。また風邪でも引かれたら大変だ。

「今日、練習終わるの早くね？ いつももつと遅いだろ？」

「ん？ うん。今日は筋トレくらいしか出来ることないから。病み上がりの奴は帰れて、追い返されちゃった」

「……堀越って人のこと、待つてなくて良いのか？」

訊くと、怜はきょとんとした様子で瞳を瞬かせる。

「待たないよ。何で？」

「だって、付き合ってんじゃねーの？」

「はああああ？ 何で？」

「え、だって告られたんだろ？」

「何で知ってんの？！」

赤面して後ずさる怜を傘で追いかけると、すぐに我に返った様子で隣りに戻ってきた。

「断ったよ。ちよつと、はじめてのことで知恵熱出したりしたけど」

「……まさか、それで寝込んでたわけ？」

思わず呆れた声を漏らすと、怜はむっとした様子で俺を睨みつけて、不機嫌そうに口を尖らせる。

「仕方ないでしょ、今までそういうの無縁だったんだから！」

「まあ、男みたいだったもんな……」

「そうですね、残念ながら。昔からおモテになって、入学早々彼女

作れちゃう直君とは違うんですー」

まずい。矛先が思わぬ方向に向かいだした。

「俺は今関係ないだろ？ 第一モテてた覚えなし」

「モテてたよ！ 中学の時とか、「榊先輩、直君と付き合ってるんですか？」って、目ウルウルさせて可愛いー女の子が聞きに来たもん。何人も」

「初耳なんだけど」

「だって言ってるじゃないもん。あたしが言っちゃったら意味ないでしょ。本人が直に言わなきゃ。「付き合ってるじゃないから頑張ってるね」って言つといたけど、直が知らないってことは結局告白出来なかったんだね。青春だわー」

「……あんま知りたくなかった情報だな、それ」

「へ？ 何で？ モテたのに？」

「何でも。つーかさ、堀越って人だって人気あるんだろ？ 振っちゃって後悔しねーの？」

「しないよ。だって好きじゃないもん」

さらりと答える怜に少々面食らう。市村の言葉に惑わされてうっかりいらぬ詮索をしてしまったことに、今更のように気付いて逃げ出したい気分になった。

「……俺格好悪ー……」

「うん？ 何が？ ま、とりあえず拭け、ホラ」

言いながら、怜はスポーツバッグにつめてあったタオルを取り出した。部員の洗濯物が突っ込んであることもある鞆から出てきたタオルを凝視して、呟く。

「……使用済み……？」

「前！ ちゃんと洗ってあるわ失敬な」

そうは言われても顔に当てた瞬間に男のムサい汗の匂いなんかしたら最悪だ。半信半疑で恐々顔に当てると、ちゃんと石鹸の柔らかい香りがした。

「ミズエの匂い」

「だから言っただでしょ、ちゃんと綺麗ってー」

「ミスエ元気？」

「母さん？ 元気だよ。最近直が遊びに来ないから寂しかった。たまにはご飯食べに来れば？」

「……考えとく」

「……直、髪の毛伸びたね」

突然話の方向が変わったことに、疑問符を浮かべて怜の方へ視線を遣る。伏し目がちに前を見ていた目線が上がって、俺と目が合うと柔らかく笑う。その肩の向こうに、フェンスからこぼれるように咲いた藤の花。雨に濡れて、鮮やかな色彩を描き出す。

「本当はね、新歓の時もその後何回か顔合わせた時も、どうしようかかなり動揺してた。受験の頃、避けてたでしょう？」

「……別に、避けてたわけじゃない、けど」

「そお？ でもまた話せるようになって良かった」

見下ろす、雨に濡れた細い肩。Yシャツの白に溶けだす、肌の色。俺を見上げる瞳にざわりと胸の奥が揺れるのを、首を振って気付かなかったことにした。頭から被っていたタオルを外して無造作に怜に付き返す。

「返す。怜のが肩寒そう」

「え、でも」

「良いよ。風邪ぶり返したら困るだろ？」

「……うん」

本当は、避けてた。会いたくなかった。

会えば必ず、忘れようと努力して押しこめたはずの痛みを思い出すのがわかっていたから。

怜と別れて、帰り着く灰色のマンションの部屋。

「……ただいま」

返事がないことがわかっていても惰性で唇から言葉が漏れる。静かに響いて、消えていく。誰もいない、一人だけの狭くて広い部屋。

おかえり、と温かく迎えてくれる手のひらや優しい笑顔を諦めたのは、どのくらい前だろうか。

父親と母親の間に小さな亀裂が見え始めたのは、確か中学に上がって少し経ってからだった。父親のいない日が増えだして、母親の顔からは笑顔が消えていった。その頃から野球よりも勉強を強要しだした母親が鬱陶しくて、両親の間でゆっくり熱を失くしていく何かを見たくなくて、その分俺は野球に打ち込んで。

そして、一番大切なものを失くした。

暗い部屋に、雨の降る音が響く。

『あたしは直君の何なの？』

そう言っ、泣いていた今村の顔を今更のように思い出す。むしろ何になりたかったのかこちらが教えてほしい。思いを傾けた分だけ愛されると思っているのなら、それはあまりにも傲慢な思いがりだ。どんなに好きだって、思いを傾けたって、振り向いてもらえないことの方が圧倒的に多いのに。

けれど。

『また話せるようになって良かった』

そう言っ、笑っ、見返りを考えずに真っ直ぐ向かってくる瞳。向き合うのが苦しくて、痛くて、逃げてしまいたいの、どうしても最後の決断が下せない。もう怜の思いに答えてやることなんてできないのに。

未練がましくて、格好悪くて嫌になる。

「ちゃんと、手離さないと、な」

多分、それが一番良い。

俺のためにも。これ以上、怜に期待を抱かせないためにも。

怜

梅雨ももうすぐ終わりに近づいた六月の最終日。

夕食後、呼び鈴の鳴る音に玄関まで出ていくと、私服姿の直が立っていた。思ってもみなかった訪問客の姿に思わずドアを開けたまま硬直する。

「よ」

「どしたの、珍しい」

「去年の数学のノート貸してくんね？ 明日テストでさー」

「別にいいけど、友達に見せてもらった方が早いんじゃないの？」

「市村が俺のノート持ってるの忘れて帰りやがったんだよ。第一あいつのノート汚すぎて読めねーし」

「えええ……。仕方ないな。じゃあ探してくるから部屋で待ってて」
「ん。よろしくー」

直を家に招き入れると、私は先に階段を上って屋根裏の納戸の電気をつける。階下からは母親が嬉しそうに対応する声が聞こえていた。

「ハイ、これ一学期の分ね」

二階の部屋に入ると、直は母親が出したらしい緑茶を呑気にすすっていた。私が差し出したノートを受け取ると、適当にページを繰って何か確認するように頷く。

「うん、必要なとこちゃんとあった。ありがとな」

「どーいたしまして。ゆっくり使ってちょうだい」

「うん、ども」

「……用事ってそれだけ？」

ベッドに腰を落しながら尋ねると、直は突然何を思ったのか、湯呑を置いて居住まいを正した。つられて背筋を伸ばすと、直の目

線が壁に貼ったカレンダーの方へ注がれる。

「あのさ、怜、来月の最初の日曜ってヒマ？」

七月の最初の日曜は夏の大会前最後の練習試合が組まれていた。

確か、午前だけで午後の練習はなかったはずだ。

「……午後からなら」

「ちよつとだけ付き合ってくんね？」

「何か、用事？」

「うん。当日、来てくれればわかるから」

全てを話しながらない直の様子にすつきりしないものを感じたけれど、真面目な表情をしているので、取り敢えず釈然としないながらも頷いた。

何でだろう。

最近直がこんな風に真面目な顔をしてることが多くて、どうもムズムズして落ち着かない。雨の日に一緒に帰った時も途中から難しい顔で黙りこくってしまつて、話しかけても生返事ばかりだったし、何かと口実を見つけてクラスに会いに行っても、ほとんど相手してくれなかったし。

それが、突然直自ら乗り込んでくるとは。一体来月の日曜に何が決闘？

「にしてもさ」

不意に、気安い調子で響いた声に我に返る。見ると、直が渋い顔で部屋を見渡していた。

「随分女の子らしくなったな、怜の部屋。俺すっげー居心地悪いんだけど」

「あー。これ、勝手に改装されたのよね……」

小学校の頃、とても女の子の部屋とは思えないくらい殺風景で散らかり放題だった私の部屋は、中学に上がって野球をやめた時、今が好機、とばかりに母親と妹に夢見る兄二人に大々的に改装された。野球選手のポスターは剥がされてキャラクターもののカレンダーに代わり、漫画本は兄貴の部屋に収容され、窓辺にはレースのカー

テン、ベッドサイドにはクマやウサギのぬいぐるみ、小物類はピンク基調のものが並び、見事母親と兄貴好みの乙女部屋が完成した。部活から帰って来て部屋のドアを開けた時には、驚くとか怒る以前に帰ってくる家を間違えたかと思った。

さすがに今はもう慣れたけど、当初は居心地が悪くて仕方がなかった。

「まあ、オテンバだったあたしも少しはこういう部屋が似合う女の子になったかしら？　みたいなの？」

「は。似合ってるねーし」

「超失礼！」

手近にあったブタのぬいぐるみを投げると、直はそれを簡単にキヤッチしてあぐらの間にのせた。

ち。投手の反射神経はまだ健在か。

「大体さ、怜はオテンバとかいう可愛いレベルじゃなかっただろ。」

「じゃじゃ馬っつーか、暴れ馬っつーか。ガキ大将だったし」

「あー、まあ、そうねえ……」

呟きながら、全盛期だった小学校時代に思いを馳せる。

女の子の筆箱にカエルを入れておいて泣かせたり、近所のガキ大将と河原で決闘したり、兄貴の靴の裏にガムテープを張っておいてぶん殴られたり、他にも他にも、思い出せばきりが無い。今となっては良い思い出だ。

「ホラ、俺がリトルの試合で初めて投手任された時とかさ、俺が六年に絡まれてたの、怜が助けてくれたじゃん」

「あー、あったねえ。懐かしい」

「俺はびっくりしたよ……。いきなり出てきて飛びかかってくから」
「だって、あれはアイツ等があんまりにも無神経だから腹立って」

確か、私が五年生の時。直が初めて先発を任された練習試合で、私たちのチームは十二点差でコールド負けした。

直は好投してたけど、それ以上に相手の打線が物凄く強くて、私たちも力バーしきれないくらいにとにかくもう打たれまくった。相

手チームの投手にも全く手が出せず、見事な惨敗。

要はレベルを読み間違った監督が悪かったのだ。

それなのに、負けたのを直だけのせいにして、大勢で四年生一人を責める上級生共の腐った性根が許せなかった。

「でもあれは大人しく苛められてた直だって悪いんだからね。やられたらやり返せば良いのに！」

「その発想は女子的にどうかと思うけどな……。でも俺出る幕なかったし」

「あー、まあ、あの子ら意外に弱かったからね……」

「あれで俺は自尊心をいたく傷つけられた。年上とはいえ女の子に守られちゃったからさ」

「え、嘘、ごめ……」

「嘘ー」

「……」

無然とした表情で口を噤むと、直は小さく嘖き出す。

「怜、喧嘩した後ずっと泣いてたし」

「……だって、悔しかったんだもん」

先発を任されて、直が物凄く喜んでたことも、毎日遅くまで投球練習をしていたこともちゃんと知ってた。だから一生懸命頑張ってた直をけなされたことが悔しくて悔しくて仕方なかった。喧嘩で勝つても悔しさが治まらないくらい。怪我したところも痛かったし。

「あれ、実は結構感動だった。誰かが自分のために怒ってくれるのって、嬉しいもんなのな」

穏やかに笑って紡がれる言葉に、胸の奥が締め付けられるような感覚がする。名前を呼びかけて、ふと、湯呑みを口元に運ぶ手に視線が吸い寄せられた。野球をやめてから日焼けすることもなくなつた手の甲に浮いた筋と長い指。こんなに大きかったっけ？

何となくむずむずした感覚を持て余していると、鼻先に押し付けられたふわふわの感触。視界が広くなると同時に、さっき直に投げつけたブタのぬいぐるみが膝の上に落ちる。

「変な顔。俺もう帰るな。勉強しねーと」

悪戯めいた笑みを浮かべる直を、憮然とした表情でねめつけた。

あと少しだけでも、と直を引き留めようとする母親をなだめて外に出る。街灯に照らされて、雨粒をたたえた玄関脇の紫陽花が淡く浮かび上がって見えた。

「ごめんね、結局遅くなっちゃって」

「いや、俺も久々だったから。おばちゃんたちと会えたのも嬉しかったし」

そう言って、淡く笑う顔。

どこか大人びたように見える表情も、こんな見上げるような位置にあっただろうか。

「……何か、顔付いてる？」

「直。手比べっこしよう」

「は？ 何で？」

「いや、何でもないけど、何となく」

街灯の弱い灯りの中に、戸惑ったような直の表情が浮かぶ。自分の右手を差し出して有無を言わせない雰囲気と、直は右手を差し出して、不承不承手のひらを合わせた。ほんの少しだけ重ねた手のひらは、直の方が想像していたよりずっと大きい。

「負けたか」

「そらそうだろ」

「背も、また伸びたね」

「あー、まだ伸びてるみたいだな。ありがたいことに。肘は伸びねえけど」

「冗談混じりの言葉。」

わかっていたのに、自然、こわばってしまった表情。取り繕うこともできずに固まっていると、直の方が困ったように笑って軽く私の頬をつねる。

「んな顔すんなって」

笑い含みの声に瞳を上げると、真っ直ぐに交わるお互いの視線。子供っぽい笑顔が淡く解けて、見たことがないような男の子の顔になる。

輪郭を撫でた指先に、喉の奥が柔く痛む感覚。

「ごめん。じゃ、俺帰るな」

顔を俯かせながらそう言って、答えも待たずに去っていく背中を見送った。

角を曲がるまで見届けてから、ゆっくり門の中に戻る。

「……びつくりした、な」

六年前、上級生と喧嘩してから泥だらけで辿った帰り道、たどたどしく髪を撫でてくれた手のひらも家に着くまでずっと繋いでいてくれた手も、私の方が大きいくらいだったのに。

いつの間に手も顔も、あんなちゃんとした男の子みたいになってたんだろう。

直が触れた頬に、それを辿る指先に、ほのかに残る柔らかな体温と輪郭を撫でた硬い指の感触。

あんな風に、付き合ってた彼女にも触れたりしたんだろうか。

しばらく身動きも出来ずに立ち尽くす。

紫陽花の花だけが、静かに私を見つめていた。

直

「失敗した……」

一人呟いて、足早に辿る帰り道。

霧のように柔らかい光に空を見上げると、濃い芳香を落とすクチナシの花の向こう、梅雨空に浮かぶ雲が途切れて上弦の月が淡い金の光を落としていた。

手を伸ばせば届きそうなくらい低い空に浮かぶ月。

けれど、どれだけ頑張っても手を伸ばしてもあの月には決して届かないことを知っている。

ふと、市村に教え損ねた英語の答えが頭をよぎって、自然と自嘲するような笑みがこぼれた。

「ないものねだり、か」

ぽつり、呟いて立ち止まる。

怜の頬に触れた指先に、ほのかに残る感触と温度。打ち消すように手のひらを握りしめて、また足早に家路を辿り始めた。

この痛みも手のひらに残る熱も、きつと、もうすぐなくなる。

来月で、全部。

怜

朝から空に薄い雲のかかった日曜日。

練習を終えて直と約束した場所に着いたのは、待ち合わせの少し前。見渡す視界の中にまだ直の姿は見当たらなかった。

うろうろと指定されたコンビ二の前をうろついて、落ち着きなくため息をつく。こういった形で会うことなんて初めてで、どう振舞ったらいいものやら全く見当がつかなかった。

服も悩みに悩んで、結局、泣きついた千鳥に選んでもらったチエツクのワンピースにレギンス、半袖パーカーという格好に落ち着いた。「髪の毛も下ろしていけば？」と言われたのだけど、鬱陶しくていつもと変わり映えのないおだんご頭にしてしまった。が、それでも気合いが入りすぎてるようで落ち着かない。幼馴染と会うただだというのに。

「何か、ちゃんと女の子みたいな格好だな」

「！」

心の声に続くような言葉に思わずびくりと体を竦める。首がぎしぎし鳴りそうなくらいぎこちなく振り向いて、そばに立っていた直の姿にぼかんと口を開けた。

以前家に来た時と大して変わらないラフなＴシャツにカーゴパンツ姿。唯一違うのは、手の中に使い古したグローブが握られていること。

「……野球、するの？」

「そ。俺も本当は嫌だったんだけど、市村の叔父さんがやってる草野球のチームが人数足りないとかで」

「市村君も来るの？」

「や、あいつは今日剣道部の試合。だからなんかもう、無理やり……面倒そうに呟く直を見ながら、頬にゆるゆると朱がのぼっていく

のがわかる。

「言つとくけど、怜も頭数に入ってるからな」

「うん！ 良いよ！ 全然かまわない！」

勢いよく答えると直は一瞬面食らったように瞬いて、それから口元を淡く綻ばせた。

「あ、でも怜スカート……」

「問題なし！ レギンス履いてるし。見えても別に困らないよ」

「……」

試合は抜きつ抜かれつを繰り返し、接戦の結果、七対五で市村君の叔父さんチームが勝利した。途中、直がマウンドに上がる場面もあったけれど、肘が痛むのか上手く投げられないらしくて、一回を投げただけですぐに交代してしまった。それでも、久しぶりに直がマウンドに立つ姿を見れたことが嬉しくて嬉しくて仕方なかった。

祝勝会に参加して帰る頃には、時間もだいぶ遅くなってきていた。適度な疲労を感じながら、何となく浮かれた足取りで街灯が照らす夜道を並んで歩く。

「良かったね、勝つて。ちゃんと助っ人の役割果たせたじゃん」

「あー、あんま活躍した気しねーけど」

「そう？ でもあたしは楽しかったな。打席立たせてもらえたし」

「まさかの2ベースヒットだもんな」

「まだ腕なまってるじゃないっしょー？」

「はは、確かに」

「……でも、久々に直が投げてるのこ見れて嬉しかった」

淡く笑いながら言っつて、ゆっくりと立ち止まる。

「あのさ、直」

「今なら、言えるだろうか。」

呼び止めると同時に、ゆっくり、心臓の音が早くなっていくのがわかる。

静かに向けられた直の視線が、それに一層拍車をかけていく。

「また野球やらない？」

真っ直ぐに交わる、私の祈るような視線と、それを静かに見返す直の視線。先に私の方から視線を外して、ぎこちない笑みを浮かべた。

「今日、打つのも走るのも問題なかったじゃない。投げるのはまだ出来ないかもしれないけど、ちゃんとリハビリしていけばまた野球出来ると思うんだ」

「どうだかな……」

「出来るよ、今日だってちゃんと」

「出来ないよ」

「……直？」

「怜もわかっただろ？ 今日の試合で、俺がもうまともに野球できないんだって」

直が何を言いたいのか良く理解できない。困惑して見上げると、直の表情のない顔は静かに手の中のグローブに据えられている。

「もう、やらない」

「……じゃあ何で、あんな風に期待させるようなことしたの？」

ぼつりと、こぼれ落ちた言葉に直の顔が上向く。

暗い色をした瞳に、泣きたいような気持ちがした。

さっきまで、ちゃんと笑ってたのに。

上手く投げられなくなつて、マウンドに立った時の真剣な横顔も、打者を抑えた時の得意げな笑顔も、野球をやってた時と変わらないと思つたのに。

「同じ高校入ってきたり、さっきみたいに草野球やってはしゃいだり、かと思えばまた野球やるのは無理とか、直が何したいんだか、もう全然わかんないよ」

気持ちをうまく抑えられなくて、感情的になつた言葉。

短く息を吐くと、見上げる直の瞳が静かに眇められた。

中学時代、ずっとずっと直と一緒にだったグローブが、私の手の中

に乱暴に押し込まれる。

「……わかれよ。もう、終わりだって」
「直」

「俺はもう、お前の期待にこたえらんない。そうやって、俺に過剰に期待するのやめてくれよ。正直、お前の夢を投影されるのうんざり。重い」

苦しげに喉の奥から絞り出すように紡がれた言葉が、重く、深く胸に突き刺さる。

脳裏を掠めたのは、鮮やかな一年前の夏の色。

俯いた、穏やかに見せた横顔。

氷水の中で揺れた陰影。澄み切った蒼と鮮やかな緑。

あの時も直の怪我に気付いてあげることができなかった。今回もまた、野球を取り戻してほしいという私の思いはただ直を苦しめるだけでしかなかったのだろうか。

上手くない。

ただ、笑ってほしただけだったのに。

空回りしている自分が恥ずかしくて、情けなくて、誤魔化すために笑おうとした唇さえも、震えて上手く言葉が出てこない。

「ごめん、ね。あたしのやってることは、全部迷惑だったんだね……」

手の中のグローブを握りしめる手のひらに力がこもる。

力なく笑って、涙がこぼれる前に踵を返して歩き出した。少し離れてから、直の視線が追いかけてくるのを振り切るように走り出す。

嗚咽のこみ上げる喉が苦しい。うまく、息も出来ないくらいに。

空にかかる雲が全てを灰色に覆い尽くしていく。

空の色も、星も、月も、涙と雲に霞んで何も見えなかった。

直

「直、昨日先輩と何かあったんか？」

「何もねーよ」

「……そか。ごめんな」

「何で謝んの？」

べたりと机につけていた頬を離して見上げると、市村が泣きそうな顔でこちらを見つめていた。

「だって、直、一日ずっと元気なかったし。本当は、野球やりたくなかったんだろ。なのに、俺、無理やり……」

「いーよ、別に。もう済んだことだし」

半眼で投げ遣りに答えると、市村は椅子の背もたれを抱きしめるように、しょんぼりと肩を落とした。

空調の音が静かに響く。

七時を過ぎた図書館は自習室以外明かりが落ちていて、生徒ももうほとんど残っていないかった。暗い部屋の底でぼんやりと光る、常夜灯の淡い光。

「直。俺さ、本当は直が野球やりたいんじゃないかって思ってたんだ」

市村の言葉に、俺は大仰に顔をしかめて体を起こす。

「……何で？」

「未練なんかないって言ってたけど、榊先輩や野球のこと話す時の直見てたら、とてもそうは思えなかったし。だから、直にお願いしたんだ。草野球の試合出てくれって。野球楽しいって、再確認してくれるんじゃないかと思って」

「……」

「なあ、またやってみて、楽しいとか、全然思わなかったか？」

「思わなかったよ」

語尾に被せるように乱暴に言っと、市村は悲しげに眉をひそめる。

「肘痛エし、全然思うように体動かないし、苦しいばかりだ」

「……さっき、榊先輩と千鳥先輩のこと見かけたよ」

「二人のことは、今関係ないだろ」

「榊先輩、目すげー腫れてた」

小さな痛みが胸を焼く。眉根を寄せて、目を逸らした。

「やっぱ、先輩と何かあったんだろ？　じゃなきゃ、直だってそんな苦しそうな顔……」

「もう野球しないって、そう言っただ、怜に」

「え？」

「あいつはずっと、俺にまた野球やらせたかったんだよ。俺はわかって知らないフリしてたけど、いつまでもそんな状態続けてるわけにいかないだろ。俺はもうまともに投げられないし。だから、もうやらないって、そう言ってきた」

「先輩は、何て？」

考えてみたら、怜は、そう、とも、わかった、とも言わなかった。泣きそうな顔で、ごめんね、と呟いた声が今更のように耳の奥で響いて、痛む。

「……特に、何も」

「直は？　本当にそれで良いのか？」

「良いも何も、出来ないんだから、仕方ないだろ」

「それって、逃げてるだけじゃねーの？」

「な、」

苛ついて声を荒げようとして、口を噤んだ。責めるでもなく怒るでもなく、ひどく真剣な表情で俺を見つめる市村の視線がそこにある。

怯むほど真っ直ぐ、俺を捉える真摯な色を帯びた瞳。

泣きそくに、けれど真っ直ぐに俺を見返した怜の瞳が重なった。ひどく傷つけた。

昨日も、あの夏の日も。

俺が野球が出来なくなつたことを自分のことのように受け止めて、
ずっとずっと、俺が野球を取り戻すことを願ってくれていたのに。
けど。

叶わないものに手を伸ばすのはもうやめた。

追いかけて追いかけて、突然手を離されるあの気持ちはもう味わ
いたくなんてない。失くしかけた野球に不様に縋りついて、それで
も手が届かなかったらどうする。

最初から願わなければ、今諦めてしまえば、これ以上失望するこ
とも傷つくこともなくて済む。だから、手を伸ばすことをやめた。
そうすれば、楽になれると思つたから。

それなのに、氷水の奥底に閉じ込めて、忘れ去ろうとしていた痛
みが消えない。

じくじくと消えることを拒むように疼いて、こんなにも苦しい。

「何で、お前らつて俺が野球好きだつて信じて疑わねーの？」

「直が、苦しそうだから」

疑問符を浮かべて見返すと、市村は拗ねたような顔で俺を睨む。

「苦しいのは、好きだからだろ？」

切なさを孕んで胸に刺さつた言葉に、泣きそうになつたのを顔を
背けて誤魔化した。無理に笑おうとしたけど上手くいかなくて、結
局泣きそうな顔になってしまった。

「マジで、そんだけの理由？」

「おうよ」

「はは。お前つて、実はすげーんだな」

「今頃気付いたか」

「うん。本当、気付くのが遅すぎたわ」

「……直？」

もう、遅い。手が届かないように傷つけて、突き放したのは俺自
身だ。

痛みの奥に留めていた気持ち、出口を探して騒ぐ。けどもう、
それをどうやって逃がしたら良いのか。それさえも分からなかった。

怜

「目の腫れ、少しはマシになった？」

梅雨が明けて、雨を降らせていた雲が夏の匂いを連れてきていた。渡り廊下を吹き抜けていく風の色や夜空に、色濃く漂う暑い夏の気配。

「ごめんね。夏大前なのに部活サボって」

「いいよ、今日くらいは。その顔で出てきた方がみんな心配するわ」
泣き腫らした目で部活に出ようとした私を、千鳥は保健室に押し込んで休ませてくれてた。ちゃんと冷やしてたのに、泣きすぎてまだ目が痛い。

「堀越先輩、気にしてたよ？」

「……うん」

「いつそのこと先輩と付き合っちゃったら？ 気も紛れるし、直君のこと諦めつくかもよ」

「はは、出来ないよ。無理」

力なく笑って、腕を渡り廊下の手すりにのせた。軽く体重をかけると、背中が粟立つような耳障りな音を立てる。

「こんな身勝手な奴とは、付き合わない方が良いよ」

「怜……」

「あたしは自分の気持ちを直に押し付けてただけだもん。また野球を出来るようになるのが直のため、とか言って、本当は、あたしが直が野球するところ見てたかっただけなんだよ」

ふと、聞こえてきた足音に耳をすませた。

見下ろすと、渡り廊下の下、直とそれを追いかけてくる市村君の姿が映る。図書館にでもいたのだろうか。すぐ下を通って、昇降口の方へと歩いて行く。

「前にも訊いたけど」

静かに響いた声に顔を上げた。

「今は直君のことどう思ってるの？　って答え出た？」

柔らかい声の調子で尋ねる千鳥に、私は軽く首を振る。考えれば考えるほどわからない。家族みたいに近くて、弟みたいに気安くて、ずっと一緒にいた大事な幼馴染。それだけで言葉にするには十分だったはずなのに、今は、それだけじゃ何かが足りない気がしてる。

直の笑う顔から目を逸らすように背中を向けて、鉄柵に強く背中を押し付けた。

親しげに話す声に、胸がざわざわする。

視線を落とした足もとに、伸びる片陰。耳障りな軋み。

何でだろう。ほんの少し前まで、こんな風に苦しくなることなんてなかったはずなのに。

「怜、あんまり背中押しつけると危ないよ」

「……うん」

「怜」

やんわりとたしなめるような声に顔を上げかけたその時、鼓膜に叩きつけるような音が響いて、次の瞬間、背中にあったはずの支えが消えた。

千鳥の呆けた表情と、校舎の壁が下から上にゆっくりと流れて、最後に瞳いっぱい夕空が広がる。

空を行く風の流れが速い。雲が切れて、淡くこぼれ出す柔らかな月の光。

「怜！」

千鳥の悲鳴みたいな呼び声が鼓膜を打って、ようやく鉄柵から落ちたんだと理解した。

他人事のように、冷静に。

無意識に伸ばした指の先、夕空の天心に宿る月は爪先が掠めたと錯覚をおこすほどに、くつきりと鮮やかな正円。

淡い光を溶かした雲は月を中心に据えて、まるで花びらのように。

月色に花ひらく。

ああ、どうして気が付かなかったんだろう。この胸を占める、痛み
の名前。

あんな風にもう自分では抱えきれないくらい、大きく膨れ上がっ
てあふれ出してしまっていたのに。

野球を取り戻してほしかったのも本当。

直がまた野球する姿を見たかったのも、約束を叶えてほしかった
のも本当。

でもそれ以上に、笑ってる顔が見たかった。

野球をした時みたいに、楽しそうに、幸せそうに。誰かの隣り
じゃなくて、私の側で笑っててほしかったの。

突き放したくなるくらい苦しい思いをさせてることが、笑顔を曇
らせてしまうことが寂しい。

だって、こんなに好きだったのに。側にいたいのに。

なのに、どうして私は直を傷つけることしかできないんだろう。

泣き出したいような気持ちで、きつく目を閉じた。

想像していたはずの衝撃は思っていたより軽く、少し待っても死
ぬほどの痛みは襲ってこなかった。もしかして、もう死んだかも
そろそろと目を開けると、すぐ目の前で淡い茶の髪が揺れる。

「……つぶ、ねー」

その一言が合図。短い瞬間にあった出来事が一気に繋がった。

千鳥の私を呼ぶ声、宙を掠めた指先、のぞいた夕空。
腕を伸ばして、私の真下に走り寄る直の姿。

「な、に考えてんのよ、このバカ!!」

叩きつけるように怒鳴ると、直は大袈裟なくらいに首を竦めて体
を小さくした。

「あぶないでしょーが! たかが二階程度の高さだって下手したら

「アンタだつて危なかつたのに！」

「いや、それはわかつてただけだ」

「わかつてない！ 無茶ばかりして本当信じらんない！」
怖かった。

「すぐく、すぐく怖かった。今頃になつて手の震えと恐怖がのぼつてくる。」

でも、目を開けた瞬間直の顔があつて、涙が出そうなくらい安心した。

「うん、ごめん。ごめん、怜。謝るから、」

「から何？！」

「怪我ないか？」

「……ねーよ！」

泣きそつになつたのを誤魔化すように、乱暴に答える。

すると直の瞳が心底安心したように揺れて、くたりと額を私の肩に乗せた。

「良かった」

抱きしめる腕は細かく震えていて、心底安心した口調で言うものだから怒りたいのも怒鳴りたいのも引つ込んでしまった。

直

診察室のドアが開く音に、怜はつられるように顔を上げた。俺の右手に白い包帯が巻かれているのを見て走り寄ってくる表情には、まだ不安の色が濃い。

「先生、何だつて？」

「軽い打撲とすり傷。あとは何ともないって。怜は？ 怪我とか平気？」

「大丈夫。おかげさまで。ありがとうね」

「市村と千鳥先輩は？」

「先に帰ってもらった。もう遅いし。市村君には後で直から連絡しておいてね。凄い心配してたから」

「ん、わかった」

頷いて、長椅子に腰を下ろす。

怜は立ったままで、心配そうに手を握りしめていた。

「んな泣きそうな顔すんなって。大丈夫だから」

「……泣いてない」

一瞬、感じた妙な既視感。記憶を辿りかけて、すぐに気付いた。

一年前の夏、交わしたのと同じ遣り取り。

「ごめんな」

呟く声はリノリウムの床に反射して、静かに夜の病院に響いていく。

「……別に、何事もなかったからもう良いけど」

「そうじゃなくて。……目、すげー腫れてるし」

呟くと、怜は慌てて目元を覆った。

「べつ、別にこれは泣いたとかそういうわけじゃなくて」

「まだ、グローブ持ってきてくれるか？」

「……捨てないよ。昨日の今日で」

「俺さ、昨日のことで、怜は俺のこと嫌いになつてるかと思つてたんだ。てか、自分でそうなるように仕向けたんだけど」

「……何、言つてるの？」

「市村に言われた。俺は、逃げてるだけだつて」

淡く笑んで、包帯の巻かれた右手を撫でる。

鉄柵から落ちてくる怜に追いつくように精一杯伸ばした肘が、柔らかに痛みはじめていた。今更のように実感する。市村の、真っ直ぐな言葉。

「本当は、怜と会いたくなかつたんだ。怜といると、どうしたって野球のこと思い出すから」

「……」

「だから、怜のこと遠ざけようとしてた。自分が、これ以上苦しめないように」

だけど、怜が鉄柵から落ちたあの瞬間、今まであんなにこたわつてた腕の痛みも、怪我することも、全く考えてなかつた。気がついた時には体が勝手に動いていて、頭には怜のこと以外何もなかつた。「痛くても、苦しくても、怜のこと失くしたくないって思った」

静かに言ってから、視線を上げる。

泣きそうな顔で、でも真っ直ぐに俺を見ってくれる瞳に、胸の奥が甘くしめつけられる感覚。小さい頃からずっと、胸の中にしまい込んでた思いがくすぐつたいような温かさを連れて、ゆっくり心に広がっていく。

「俺、怜が好きだ」

きつとこの腕の柔らかな痛みごと、全部。

淡く笑つて言つと、怜の瞳が驚いたように瞬いて、それから、ひとつ、静かに涙がこぼれ落ちる。ひとつ、またひとつと、怜すら戸惑っている様子で、次々と頬にあふれて、こぼれ落ちていく。

「あ、うわ、やだな、止まらない」

「俺もう怜のこと甲子園に連れていけないし、まともに野球もできないけど、怜の側にいても良い？」

立ち上がって顔をのぞき込むと、怜は涙でぐちゃぐちゃになった顔で睨むように俺を見上げる。

「あたしはまた、直を傷つけるかもしれないよ？」

「良いよ。俺のが、怜のこと傷つけたし」

言つと、怜は黙ったまま、俺の腕の包帯の巻かれた部分に拳をあてた。

刹那、疑問符を浮かべる間もなくそれがぐりぐりと傷口にねじ込まれる。

「いだだだだだ！ 痛い！ 怜、痛いって！」

「ばっかじゃないの！」

「……怜？」

涙目で見返すと、怜はさっきよりも更に盛大に涙をこぼしながら、ひとつ、乱暴に息を吐いた。

「寝ぼけたこと言わないで！ 傷つけてたのはあたしの方じゃない

！ 無神経で鈍感で、直の気持なんか全然考えてなかったのに、なのに、あたしのこと庇ってこんな怪我までしてバカじゃないの！ 本当バカ！」

「……バカバカ言いすぎなんだけど…… 今日何回目……」

「あたしは、直に好きになってもらうような資格なんてない」

「……」

「でも、こんな傷つけてばかりなのに、直が側にいないと苦しいの」

「……怜」

「直が好きなの」

真っ直ぐ、俺の目を見て紡がれた願うような声。言つと同時に、瞳が大きく揺れて、頬にぽたぽたと涙がこぼれる。俺の腕を掴む怜の手のひらに、切ないくらいに力が込められていく。

「側にいて。お願いだから、他の子のものになんかならないで」

揺れる細い肩に、胸が締め付けられるような感覚。

「……さわってもいい？」

「どーぞ！」

涙声で乱暴に答える怜に苦笑して、包帯の巻かれた右手を伸ばした。ためらいがちに伸ばした手のひらが輪郭を掠めて、そっと怜の耳元に触れる。

柔らかい髪が指先を撫でる感覚。

温かい、怜の温度。

「……やっと届いた」

追いかけて手をのばして、ようやくつかまえたぬくもり。

何だか泣きたいような気がして、誤魔化すように怜の肩口に額を押し付けた。

そのままに抱き締めた怜の体は、びっくりするほど細くて、温かい。

「言っとくけど、俺他の子にこういうことしたことないからな」

「本当、に？」

「本当。こんなの、怜にだけだ」

他の女の子じゃ、代わりにもなれない。

離れていた距離を埋めるように壊さないように、きつく抱きしめる腕に力を込めた。

怜

病院を出て、月明かりが照らす道を二人で並んで歩く。

「怜、今度さ、押し付けたグローブ返してもらっても良い？」

「うん？ それは別に、直のだから構わないけど、何で？」

「……俺さ、市村のおじさんの草野球チーム入れてもらおうかと思
つて」

「！」

「市村の思惑通りで悔しいんだけどさ、やっぱり楽しかったんだよね
ー、野球。まあ、リハビリとかしながらだから、そんな無茶できな
いけど」

「良いと思う！」

即答する私に、直は柔らかく笑って手のひらに指先を絡めた。

「リハビリ、手伝ってくれるか？」

「もちろん。ちゃんと投げられるようになるまで付き合っよ」

クチナシの花が香る、夕月夜。

白く咲き誇る花に、月色の花が寄り添うように咲いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3940w/>

月色に花ひらく

2011年9月12日03時13分発行